

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第37回は、2025年5月に1150年式年祭を迎える鳥生地区の三嶋・祇園神社の由緒を歴史散歩したいと思います。

## 第37回 鳥生の三嶋・祇園神社

### ●鳥生の三嶋神社

神社名に「三嶋」や「大山祇」（大山積）がつく場合、多くが祭神に大山積神を祀り、大三嶋宮浦の大山祇神社の末社となります。その数は全国に1万社余りを数え、鳥生地区の三嶋神社もその一社となります。

その起源は『三嶋宮御鎮座本縁』などによると、飛鳥時代の崇峻天皇2（589）年までさかのぼります。異国からの侵略者・鉄人を、当地方の豪族・越智益躬が播磨国で撃退します。凱旋した益躬は、越智郡木の下の浜に上陸し、榊の大樹の枝に鏡をかけて大山積神を祀りました。すると、この木に多く白鳥が巣を作って雛が生まれたので、同所を「鳥生の宮」と称するようになります。当社が現在地へ移ったのは明治2（1869）年のことで、もとは500m東の新田字宮の本にありました。以来、三嶋神社と祇園神社の二柱の神をお祀りしています。

以上が、鳥生の地名の由来であり、同地区における三嶋神社の由緒となります。この白鳥は「白鷺」を意味し、白鷺が大山積神のつかわしめの由縁ともなっています。益躬は越智氏の祖とされ、当所に館を設け、亡骸は蔵敷地区に葬られたようです。鴨部神社の大楠がその目印のようで、同社は益躬を祭神とし、付近には「樹ノ本」の小字が残ります。隣接する東禅寺は益躬の創建と伝わり、同氏を祖に仰ぐ河野氏によって後に再興されています。



越智益躬を祀る鴨部神社（今治市蔵敷町）

### ●三嶋大祝氏と鳥生の関係

大山祇神社の神職を担う大祝氏も、越智氏を祖に仰ぎます。『三嶋大祝家譜資料』などによると、その三嶋大祝氏の宗家は、初代・大祝安元の頃に越智郡高橋郷の別名塔本（日高地区）に屋敷を構えていました。その塔本の小字の近くには、鎌倉時代後期造立と思われる端谷五輪塔群があり、大祝家墓地と考えられています。現地に屋敷があったのは天正2（1574）年までで、その後は鳥生郷に移住し、大切な神事や社用がある時に大三嶋へ赴いていました。このため、今治（府中）でも諸事がこなせるよう、別宮大山祇神社が勧請されました。

同家に転機が訪れたのは、江戸時代の延宝3（1675）年のことでした。今治・松山の両藩主（共に久松松平氏）は、38代大祝安朗に対して、今治領鳥生村から松山領宮浦村へ移るよう命じました（三嶋姓を称するのは40代安躬の頃から）。一方、安朗の弟・安賢は今治城下に留まり、2代藩主松平定時に7石2人扶持で召し抱えられて河上姓を称します。蒼土川改修工事で功績をなした河上安固は、安賢の孫にあたり、安固の子・安重の代から古土居姓に

改姓しています。祇園町に安固の墓があるのはそのため、その近くにかつて鳥生大祝屋敷がありました。現在、三嶋・祇園神社の境内にある御銚社は、大祝家の先祖を祀る社でした。

## ●鳥生の祇園神社（祇園さん）

日本三大祭りの一つで知られる京都の祇園祭りは、疫病消除を目的に平安時代から始まった八坂神社の祭礼です。その末社にあたるのが鳥生の祇園神社で、本社同様に「祇園さん」として親しまれ、当地方で有名な夏の年中行事となっています。

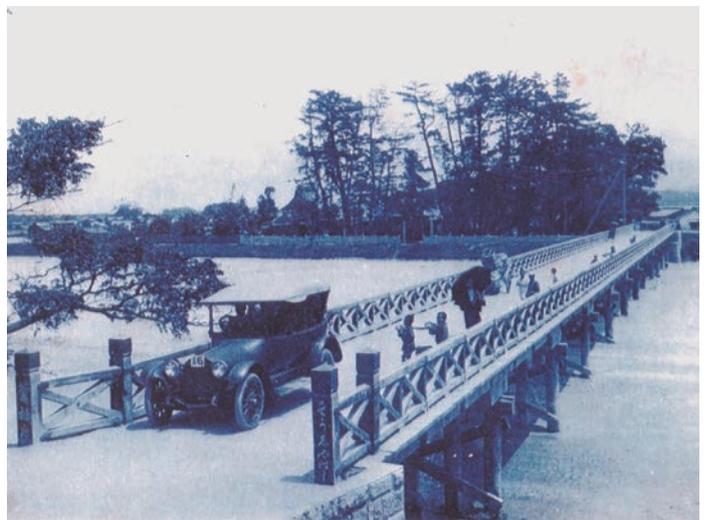
大正3（1914）年8月5日の賑わいが、海南新聞の記事（同9日付）から浮かび上がります。「蒼社川の賑、というタイトルで「当日は朝来氷・西瓜・菓子の各売店のほか見せ物などいずれも蒼社川原に場を構え、参詣者は午後四時頃より出初め午後八、九時頃は今治町より同神社まで約二十丁（約2km）の県道は人をもって埋め、自転車・腕車（人力車）は通行の余地なく、また神社境内は勿論さしも広き蒼社川原及び橋上は人をもって埋めたる盛況なり」とのことでした。

令和の現在は、川原にこそ出店はありますが、境内にかき氷・りんご飴・金魚すくいなどの出店が多く立ち並びます。拝殿前参道には疫病消除・病氣平癒を目的に輪越が設けられ、授与所では人形に家族名を記した夏越御形代を納める氏子の姿を目にします。

また、境内には「獅子舞発祥ノ地」碑もあり、明治初年に氏子の高山重吉が上方から獅子舞芸能の技を伝えたようです。これが乃万・大西・玉川地域へ伝播し、当地方の獅子舞のもとになったと伝わります。三嶋神社の春祭りでは、神輿運行以外に獅子舞と奴行列が観衆の呼び物となっています。



鳥生祇園さんの輪越し（2024年7月撮影）



大正期ころの木橋の蒼社橋（絵葉書より）



鳥生獅子連中の獅子舞芸能（2023年5月撮影）